エスペラント語再考(一)
ヨーロッパ史家の観点から

加　藤　一　郎

La rekonsidero pri la internacia lingvo "Esperanto"
El la vidpunkto de la historiisto pri Eŭropo

KATO　Iĉiro

〈はじめに――問題の所在〉

1887年、ポーランドのユダヤ人眼科医ザメンホフが、国際共通語として彼が創案した言語「エスペラント」を提案してから、1世紀以上が経過した(1)。たしかに、このザメンホフのエスペラント以前にも、また以後にも、その目的は多様であるが、様々な人工的な国際共通語が創案されたが(2)、今日にいたるまで、多数の人々に使用され、また世界各地に組織を持っているのはエスペラントだけであり、国連のユネスコもエスペラント運動の蓄積を評価して、一連の決議のなかで、国際的な知的交流でのエスペラントの役割を承認している(3)。だから、「エスペラントは人工的な国際語のなかで、多分もっとも成功した言語であろう」（ブリタニカ百科事典エスペラントの項目）ということも可能ではある。

しかし、エスペラントの置かれている状況を冷静に考察すれば、エスペラントの「成功」は、登場しては消滅した多くの人工的国際語の中で、生き残り、注目すべきに足る支持者を集めているという消極的かつ限定的な

意味合いにおいてであり、異なった言語を使用する人々の相互理解のためにエスペラントを全世界に普及するという運動の目的から、依然としてかなり隔たっているといえる。例えば、エスペラントを使用している人々は、全世界10万人程度と推定されるし、最大組織である世界エスペラント協会（Universala Esperanto－Asocio）の加入者は1980年代の統計では３～４万であり、しかもそのほとんどが後述する理由から、かつての「社会主義国」であった東ヨーロッパ諸国（ブルガリア、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー）に偏っている(4)。英語を母語として使用している人３億以上（公用語として使用している人を加えると７億5000万）、フランス語を話している人１億という数字と比較すると、エスペラントはかなり少数であり、これまでの１世紀間の熱心な普及運動を考えると、かなり厳しい現実といえる。国際共通語としてのエスペラントの普及を支持する「エスペラント出版社」が1982年に刊行した論文集『現代におけるエスペラント。言語問題、コミュニケーションにおける権利、国際語に関する研究』の序文も、この厳しい現実を認め、率直にこう述べている。

「国際語が初めて発表されたほぼ百年後の今日であっても、現代の教育制度を経験した大多数の人々は、エスペラントがなんであるか知らないように思われる。さらに、エスペラントが言語であることを知っている少数の人々でさえも、エスペラントに関して、間違った概念を持っている。すなわち、エスペラントのような論理的な言語を学ぶことは困難に違いない、エスペラントは民族語を放逐しようとしたがっている、エスペラントには文学がない、エスペラントを詩作や学問に使うことはできない、エスペラントはもう昔に死んでしまった、という意見を抱いている人が少なくないのである。事実、情報を集めるために、公共の図書館にいっても、エスペラントに関する古い書物しかなく、この言語はもはや言語問題の解決手段とは考えられないという印象を受けることになる。さらに、英語を話してい

る人々は、言語問題が存在することすら、自覚していないのである。」[5]

エスペラントが今日おかれている状況について、以上のことから確認できることは、第一に、熱心なエスペランチストの存在にもかかわらず、また「発表後100年以上も生き続け、一定以上の学習者・使用者を擁し続けている人工国際語は、ほかにはない。おそらく、今後も出てこないだろう。また、エスペラントが、この百数十年間に、世界中の知識人や文化人に与えてきた影響の大きさは、単純な使用人口では測ることができない」[6]という発言を限定的に認めるにせよ、もはや、エスペラントが忘れ去られようとしていることである。換言すれば、言語文化に深い関心を抱いている人々以外には、エスペラントは「過去の出来事」あるいは「若い日々の郷愁」にすぎなくなってしまっているということである[7]。

第二に確認できることは、ザメンホフがエスペラントを国際共通語として提案した19世紀後半から今日までの1世紀のあいだに、まさに革命的といえるほど、国際的な舞台での英語の影響力が増大したこと、換言すれば、エスペラントのおかれている言語環境が劇的に変化したことである。ザメンホフが人工的な国際語に関心を抱くようになったのは、彼がおかれていた多言語的な環境によってであった。彼が生まれたのは、今日のポーランドのビャウストク、当時はロシア帝国のベロストークのユダヤ人家庭であり、父親はドイツ語の教師であり、彼の家庭ではポーランド語が、周辺のユダヤ人のあいだではイェーディッシュ語が、学校ではロシア語が使われており、この町のおかれてきた歴史的な状況に由来する複雑な多言語環境が、民族的な対立・差別、相互理解の欠如を生み出していた[8]。生まれたばかりのエスペラント運動が直面していたのは、こうした多言語環境をどのようにしたら克服できるかということであり、人工的な国際語による多言語環境の克服という目的については、ヨーロッパ各地でかなりのコンセンサスが存在していた。だから、ザメンホフや彼の同志達は、運動の力

点を、国際共通語の必要性をアピールすると同時に、様々な人工語の中でエスペラントが人工的な国際語にもっともふさわしい言語であることを宣伝し、支持者を質的・量的に拡大することにおいておけばよかった。

しかし、1世紀後の今日では、エスペラント運動が直面しているのは、多言語環境というよりも、英語の影響力の劇的な増大による英語の一元的な支配という言語環境である。すなわち、英語はすでに国際共通語の役割を果たしつつあり、もはや人工的な国際語は必要ではない、もし国際共通語が必要であるとしても、英語をそれにあてればよい（いわゆる「英語＝国際語」論）という趨勢である。

したがって、エスペラント運動だけではなく、人工的な国際語が必要であると考えている人々が直面している課題は、人工的な国際語による多言語環境の克服が必要であるというコンセンサスが失われつつあるという意味で、したがって、人工的な国際語の必要性という大前提を人々に再び確認させなくてはならないという意味で、ザメンホフの時代よりもむしろ困難になっていると思われる。ユーゴスラビアのエスペランチスト・セケリは「社会は国際語を緊急に必要としているが」、「エスペラント運動の問題は、どのようにしたら国際語の必要性を社会に認識させることができるかにある」と述べているが、この発言および彼の講演の題目（「社会は国際語を必要としているか」）自体が、エスペラントが直面している困難な、もっと極端に表現すれば、追い込まれた状況を象徴している(9)。

では、エスペラントはこの困難な状況から脱出できるであろうか。もし脱出できるとすれば、どのような視点から、人工的な国際語の必要性を考察することによってなのであろうか。本小論は、以上のような問題意識から、今日エスペラントがおかれている英語の一元的な支配の歴史的過程とその結果として生じた問題点をあとづけることによって、人工的な国際語としてのエスペラントの可能性を考察するものである。

（本小論は、〈英語の一元的な支配過程とその問題点〉———以上本号、〈これまでのエスペラント運動の問題点〉、〈学術補助言語としてのエスペラントの可能性〉———以上次号———の3章から構成される予定である）。

〈英語の一元的な支配過程とその問題点〉

特定の言語が、もともとは地域的にも使用者の数の面でも限定された民族語でありながら、母国語の異なる様々な人々によって広範に使用されるようになるには、この言語を母国語とした国家・民族の経済的・文化的影響力がその他の言語を母国語とする様々な国家や民族のなかで、かなりの程度大きいものであることが前提となる。簡単にいえば、言語の影響力は、その言語を使用する国家・民族の経済的・文化的力量と、それを保証する政治的・軍事的な力量に比例する。

ヨーロッパ史を例にとれば、ローマが地中海を「我らの海」とする世界帝国に成長すると、ラテン語がローマに服従する広大な地域、様々な民族のあいだでの「公用語」の役割を果たした(10)。さらに、ローマ帝国の解体後のキリスト教世界では、聖書は西方ローマ・カトリック圏ではラテン語、東方ギリシア正教圏のビザンツ帝国ではギリシア語、スラヴ諸国では教会スラヴ語でのみ記述され、典礼もそれぞれの言語で行われるようになると、ラテン語、ギリシア語、さらに教会スラヴ語がそれぞれの地域で「公用語」の役割を果たすようになっていった。なかでも、とくに西ヨーロッパ・中央ヨーロッパ地域では、古代ローマ帝国に由来するラテン語は、文化の担い手あるいは様々な行政文書・法律の作成作業に責任をおっていた聖職者階層にとっては、近代にいたるまで、いわば国際共通語の役割を果たし続けた(11)。

ただし、古典古代のギリシア・ローマ文明は中世ヨーロッパに直接継承されたわけではなく、7世紀に登場したイスラム帝国に継承され、そこか

ら12世紀ごろにヨーロッパに逆輸出されたことに注意しなくてはならない。このことを言語の影響力の面からみると、イスラム帝国は9世紀ごろからギリシア語の作品を精力的にアラビア語に翻訳し、それらを帝国の図書館に蓄積し、その後、十字軍時代を経て、イスラムの科学と哲学に関心を抱いたヨーロッパ側が、イスラム固有の科学や哲学の著作だけではなく、アラビア語に翻訳されていた古典古代文明の作品をラテン語に翻訳したことになる。したがって、12世紀ごろのヨーロッパの知識人はあらそって（今日の日本の英語ブームと同様に）アラビア語を習得しようとしたのであった。当時のヨーロッパの王侯貴族にとっては、アラビア風の衣装をまとうことが最新ファッションであったことなどを考えると、経済的・文化的力量こそがその経済・文化を担う言語の普及を促進するという事実を確証している(12)。

だが、西ヨーロッパにおけるラテン語の支配は、ローマ教皇を中心とするキリスト教共同体という理念の崩壊およびイギリス、フランスなどの国民国家の登場によって揺らいでいく。ローマ・カトリック教会の免罪符の発行を批判して、宗教改革の口火をきったマルティン・ルターはワルロブルクに隠れていたときに、新約聖書をドイツ語に訳し、このことが近代ドイツ語の形成に大きな影響を与えたこと、またイギリスでもローマ教会から独立したイギリス国教会の確立とともに聖書の英訳が完成したことはよく知られた事実であるが、このことはローマ教皇権への挑戦が、ラテン語の支配への挑戦でもあったことを意味している。

また、ローマ教皇権との対立なかで王権を確立していった絶対君主たちは、自分達の地域的な支配に対立する普遍的な教皇権の影響を排除するために、ラテン語を排除して、自分の支配する地域で主流の言語＝民族語に国家語として地位を与えることによって、王権を強化しようとした。例えば、フランスでは、フランソア1世は1539年にヴィレル・コトレの勅令

（Ordonnance de Villers－Cotterêts）を発して、それまでラテン語で行われていた裁判の判決や記録をすべてフランス語で行なうことを命じているが、この勅令はあわせて教会裁判権と世俗裁判権の管轄区分の明確化、戸籍の作成を命じていることからもわかるように、あきらかにフランス語＝国家語の導入によって、「国民国家」の統合を意図したものである。結局、17世紀ごろになると、ラテン語は聖職者＝知識人の「国際共通語」としての地位を失い、ヨーロッパには、例えば、商業の分野ではオランダ語が、文化的な分野ではフランス語が優位を占めるといったように、一元的な影響力を持つ言語はなくなり、いわば多言語的な環境が産み出されていった。さらに、19世紀に入ると、民族主義運動の高揚のもとで、それまで国民国家や他民族国家の中で抑圧されていた少数民族の言語も自己主張をしはじめ、多言語的な環境はいっそう複雑になっていった。ザメンホフがエスペラントを提案した時代も、このような時代であった。

ラテン語が「公用語」としての地位を失いつつあった17世紀、英語はまだヨーロッパ大陸から離れた孤島の小言語にすぎなかった。その英語が、300～400年間で、今日のガリバー的な巨人言語に成長するのであるが、歴史的な諸事件と英語の普及・支配との関連を以下にまとめておく。

●14世紀：英語（正確には今日の英語の始祖）を話す人々は約225万人。

●1588年：イギリスはスペインの無敵艦隊を撃破することで、イギリス絶対王政の基盤を固めることに成功する（ローマ・カトリックを支持するスペインの攻撃を撃退したことで、イギリスにおけるローマ・カトリックの復権ひいてはラテン語の復権を防いだ）。

●1620年：メイ・フラワ号に乗った清教徒がニュー・イングランドに移住して、プリマス植民地を建設した（北米大陸への英語の普及の開始）。

●1653－54、1664－67、1672－74年：イギリスは3度にわたる対オランダ戦争に勝利を収め、オランダの貿易・通商面での覇権を打破した（それま

での貿易・通商面でのオランダ語の優位を覆し、たとえば今日の航空管制分野での英語の一元的支配の基礎を築いた）。

●1744－48、1750－55、1758－63年：イギリスはヨーロッパでのオーストリア継承戦争と7年戦争と平行する、インドでのカーナティック戦争でフランスに勝利を収め、インドでのフランス勢力をほぼ駆逐した（インドにおける英語の一元支配の開始）。

●1755－63年：イギリスはヨーロッパでの7年戦争に平行した北米大陸でのフレンチ・インディアン戦争に勝利を収め、フランス勢力を北米大陸から駆逐した（カナダへの英語の浸透）。

●1776年：アメリカ合衆国がイギリスから独立した（イギリス勢力は北米大陸から後退したものの、英語の支配は継続され、合衆国の膨張とともに拡大していった）。

●1788年：オーストラリアがイギリスの流刑囚植民地となった（太平洋の南半球への英語の浸透と支配の開始）。

●1789－1814年：イギリスはフランス革命とナポレオン戦争の過程で、フランスの膨張を撃破し、フランスがイギリスに匹敵するような世界帝国となることを阻止した（今日にいたるまで、国際的な舞台でフランス語を第二位の地位におとしめた）。

●1804年：アメリカ合衆国はフランスからルイジアナ地方を購入した（アメリカの西部開拓とともに英語もアメリカ西部に普及していった）。

●1842年：イギリスはアヘン戦争の結果、清から香港を獲得した（香港は英語の東回りでの進出の過程で、北半球での最東端となった）

●1846－48年：アメリカ合衆国はメキシコとの戦争に勝利を収め、カリフォルニアなどの西海岸地方を手に入れ、太平洋に到達した（英語は西部地域でのスペイン語を駆逐して北米大陸ほぼ全域を支配することになった）。

●1898年：アメリカはハワイを併合し、また米西戦争の結果、スペインか

らグアム、フィリピンを獲得した（英語の太平洋地域への進出。またフィリピンではスペイン語の地位が後退し、フィリピンは西回りでの英語の進出の最西端となった。東回りでの英語の進出とつなげて、英語の世界一周を完成するには、日本と日本の支配下にある台湾をだけが残された地域となった）(13)。

●1914－19年：第一次大戦で、イギリスとアメリカ合衆国は協力して、19世紀後半から急成長していたドイツのヨーロッパ支配を阻止した（ドイツ語がヨーロッパの主流となることを阻止した）。

●1939－45年：第二次大戦でイギリスとアメリカ合衆国は協力してナチス・ドイツを撃破するとともに、ドイツを東西に分割した（ドイツ語がヨーロッパで支配的となる可能性をつみとった）。

●1941－45年：アメリカ合衆国は日本との太平洋戦争に勝利を収め、日本を占領し、保護国とした（戦後日本における英語の影響力が著しくなり、英語の西回りの進出と東回りの進出がつながることになった）。

●1945年：第二次大戦の結果、アメリカ合衆国とソ連が世界を二分し、ヤルタ・ポツダム体制が成立した（この結果、それまで歴史的・地理的関係からドイツ語が有力であった東ヨーロッパ諸国の大半がソ連圏に入り、半ば強制的ではあるが、この地域では、ドイツ語にかわってロシア語が優位を占めることになった）。

●1949年：アメリカ合衆国を中心としてヨーロッパの西側諸国の集団的安全保障機構であるＮＡＴＯが成立した（アメリカ合衆国の母国語である英語が、その軍事・経済・文化的な優位を背景に、西ヨーロッパ諸国の「公用語」となっていく）。

●1949年：国共内戦の結果、親ソ連的な中国共産党政権がシナ大陸を支配し、親米的な蔣介石政権が台湾に放逐された（またその後の、朝鮮戦争の結果、東ヨーロッパからシナ大陸、朝鮮半島北部までが、ロシア語圏には

いることになる)。[14]

●1957年：ソ連が人口衛星の打ち上げに成功し、科学技術での優位を誇った（一時的ではあるが、ロシア語の習得が世界的なブームとなった)。

●1959年：中ソ対立のなかで中ソ技術協定が破棄され、ソ連の技術者が中国から引き揚げた（中国でのロシア語の影響力が後退していった）。

●1980年代後半：東ヨーロッパの「社会主義国」およびソ連が崩壊し、中国も改革・開放経済政策を取りはじめ、アメリカ合衆国だけが唯一の世界強国となった（旧社会主義圏でのロシア語の地位は凋落し、ほぼ地球的なレベルでの英語の一元的な支配が完成した)[15]。

以上のように見て来ると、言語の影響力は、その言語を使用する国家・民族の経済的・文化的力量と、それを保証する政治的・軍事的な力量に比例するという観点からすれば、英語の急速な普及と支配は、植民大国としての大英帝国の興隆、大英帝国の衰退の後には、アメリカ合衆国の世界帝国への成長という近・現代の国際関係史の諸事件の当然の結果であった[16]。もっと時代を限定すれば、今日の国際秩序を形作った20世紀の３つの戦争（第一次大戦、第二次大戦、米ソ冷戦）で全勝を収めたのが、イギリスとアメリカ合衆国という英語を母国語とする国家であったがゆえに、今日の英語の一元的な支配という言語環境が生まれたといえる[17]。したがって、エスペラントの可能性を探る場合でも、たんにエスペラントの方が英語よりも習得が簡単であり、言語学的にも優れているということを主張するだけではすまされず、今日の国際秩序のもとでは、英語が世界のかなりの地域で重要な役割を果たしており、各地域の民族語のなかに無視し得ないほど浸透しているという事実を直視することから出発しなくてはならない。

このような英語の優位は、国際交流のあらゆる分野でも圧倒的である。例えば、公的な国連総会などでは、英語、フランス語、スペイン語、ロシ

ア語、中国語の５つの言語が同時通訳の付く公用語(oficialaj lingvoj)とされているが[18]、国連諸機関の日常的な活動の中で使われる作業語(laborolingvoj)としては英語とフランス語、とくに英語が圧倒的な地位を占めている（国際的な舞台における英語とフランス語の力の割合は、大目に見て10：１ぐらいであろうといわれている）。

こうした中でも、母国語以外の外国語の中で英語の地位が圧倒的に高いのは、日本であろう。起源をたどれば、すでに明治政府の中において、当時、外交用語の主流であったフランス語ではなく、英語が優勢であったことに行き着くのであろうが[19]、今日の外国語＝英語、ひいては国際語＝英語、国際人になること＝英会話ができることというような風潮が我が国では、際立っている。例えば、我が国の中・高の教科科目として、正式に設定されているのは「外国語」であり、建前の点では、タガロク語であろうと、スワヒリ語であろうと、あるいは人工語であるエスペラントでさえも、「外国語」教科として選択することは可能である。しかし、前述の風潮と、大学の試験科目の大半が英語であるために、きわめて少数の例外を除いて、北は北海道から南は沖縄までの全国の中学校・高校では、英語が教えられており、一般的には「外国語」とは英語のことであると受け取られているのが実情である[20]。

このような英語の一元的な支配の結果、どのような自体が生じてしまったのか。

1980年にストックホルムで開かれた第65回エスペラント世界大会は、直接、英語の支配に言及しているわけではないが、今日の事態を「言語差別」ととらえ、次のような決議をしている。

「(1) 言語差別問題は、別の形の差別と密接に関連しており、この別の形の差別は常に言語問題の側面を持っている。

(2) しかし、言語差別は独自の問題として明確に区別できるのであって、それはしばしば人種・民族問題と混同されてしまうが、実際には独自の特徴を持っている。

(3) 固有の異なる言語を持つA、B二つグループのうち、Aグループが B グループの言語を学習・使用しなくてはならず、B グループは A グループの言語を学習する必要がないときに、言語差別が生じる。

(4) 言語差別を受けるのは、一国家の中の言語的少数派だけではなく、世界的な規模では、独立民族、国家も言語差別を受ける。

(5) 他の言語を使用する人々のと接触にあたって自分固有の言語を使用し、自分の言語を使うように強制している人々が、言語差別を実行している。

(6) 他の民族によって特定の生活分野（例えば、教育、職業、国際交流）で他民族の言語を使うことを強制されている人々は、言語差別に苦しんでいる。

(7) 諸国家のあいだでの言語差別は、国際組織内部での言語政策に反映している。国際組織では、特定の民族語が作業語として推奨され（その結果、特定の国家が他の国家に優越する状況を産み出している）、そのことによって、弱小国家や民族の言語が排除されているのである。」[21]

また、英語の一元的な支配あるいは英語＝国際語論を鋭く批判する津田幸男氏は、今日の状況をもっと具体的に、こう述べている。

「英語を母国語とする人間、または英語が堪能な人間と、英語を母国語としないか、または英語が堪能でない人間が出会って英語で話をするとき、何が起きるかは明白である。具体的にいうと、アメリカ人と日本人が英語で話し合うとき、日本人は表現を制限されるばかりか、相手のいうことも聞きとれず、不利な立場に追い込まれる。日本人の基本的な権利や立場が

失われることさえある。『英語支配』は、こういった不条理な現実の蓄積と繰り返しにより正当化され、動かしがたいものになってきている。英語支配を支えるイデオロギーは、英語＝国際語、という現在世界中に広まっている認識である。このイデオロギーが、一方では、英語国民が高圧的に英語を押し付けることを許しており、他方で、非英語国民が強迫観念的に英語を学ばされ、使わざるを得ない状況に追いこんでいる。」(22)

この津田幸男氏の状況認識は、英語の支配に否定的な人々、英語の支配の中で不利な状況に追い込まれている人々だけではなく、英語支配に肯定的な人々、英語の支配から利益を享受している人々にとっても、受け入れられる認識であろう。なぜなら、英語の一元的な支配は、特定の国家・民族が国際秩序の中で政治的・経済的・文化的・軍事的に優位を占めている場合、その国家・民族の構成員がその母国語とともに、他の国家・民族の構成員と彼らの民族語に対して優位を占めてきたという人類史の冷厳な事実の反映にすぎないからである(23)。しかし、英語の一元的な支配が今日の国際秩序の反映であるとすれば、英語の一元的な支配の克服は非常に困難であることになる。したがって、「存在するものは合理的である」という歴史家の「冷笑的」な観点からすれば、英語を母国語とする人々中心の国際秩序が続く限り、英語の一元的な支配も続くであろうし（逆に、この秩序が解体すれば、自動的に英語の一元的な支配も終了する）、もしも、政治的・軍事的・経済的な手段によって、この国際秩序を解体するという手段を取らないとすれば、残されている手段は地道な、もしかするとほとんど成果をあげることのできないかもしれない、啓蒙的な運動あるいは意識改革運動だけにすぎない、という結論になる。エスペラント運動が、その熱心な支持者の活動にもかかわらず、ザメンホフ死後１世紀の今日にいたっても、支持者の拡大という面でさしたる成果をあげていないもの、まさにこの冷厳な事実のためであった。

したがって、問題は、現在の国際秩序が少なくともかなりの期間続き、英語の一元的な支配がかなりの期間続くであろうという状況の中で、英語を母国語としてない国家・民族が、どのようにしたら自分達の国家的な利益・民族的な利益を守っていくことができるかという点にある。そして、既存の国際秩序の変革という課題は、「言語」の問題をはるかに越える問題であるので、「言語」の問題としては啓蒙的な意識改革運動しか手段が残されていないとすれば、その中で、エスペラントにはどのような可能性、方向性があるのであろうか。　（以下次号）。

注

(1) 周知のように、ザメンホフがわずか40頁の小冊子『国際語――序言と完全な教科書』をロシア人むけにワルシャワで発表した時には、彼自身は自分の作った言語を「国際語（международный язык, lingvo internacia)」と呼んでいたが、「希望する人」を意味する「エスペラント」を使って、「エスペラント博士（Доктор Эсперанто, Doktoro Esperanto)」という筆名で出版したために、この「エスペラント」という単語が言語自体の名前として普及するようになった。

(2) 例えば、1879年には、ドイツ人聖職者シュライヤー（Johan Martin Schleyer）が自分の創案した人工的国際語「ヴォラピュク(Volapük)」を発表しており、一時かなりの成功を収めたが、内部対立などのために、1890年頃には消滅してしまった。また、エスペラント運動のなかでも、「イード（Ido）」問題に見られるように、言語学的な論争あるいは個人的な主導権争いのために、エスペラントの改良・修正をめ

ぐって組織的な対立がたびたび起こっている。1931年に刊行されたドレゼンの『世界語の歴史』（E.Drezen, Historio de la Mondolingvo, Moskvo, 1991）巻末の「普遍語・国際語の提案・提起年表」は、1603年から1929年までのあいだで、467件の人工的な国際語やそれに関連する試みを列挙している。また、『言語学百科事典』（大修館、1992）の「人工言語」の項目、二木紘三『国際共通語の夢』（筑摩書房、1994）も参照していただきたい。

(3) 1954年のユネスコ第8回総会は、「国際的な知的交流および世界の諸国民の友好の分野でのエスペラントの実績に注目し、この実績がユネスコの目的と理念にこたえていることを認める」、1985年の第23回総会は「エスペラントが異なる民族のあいだでの国際的な理解と交流のために大きな可能性を持っていることを認める」と述べている。

(4) 東ヨーロッパ以外では、日本が多いといわれているが、ユーゴスラビアのエスペランチスト・セケリ（T.SEKELJ）は、80年代後半の時点で「日本では500人くらいのうまくエスペラントを話す人々がいる」と推定している。Socilingvistikaj Aspektoj de la Internacia Lingvo,Tokio,1987,p.163.日本が例外的に多いのは、他の西ヨーロッパ諸国と比較すると、マルクス主義などの社会主義思想の影響力が強く、今では「負の遺産」となってしまったエスペラント運動の社会主義的側面が作用した結果であろう。また、二木紘三氏は、前掲書のなかでエスペランチストの数について、「結局、世界のエスペランティストの数は、数万から数百万という、きわめてあいまいな数字にならざるをえない」と述べている。

(5) Esperanto en la moderna mondo,Studoj kaj artikoloj pri lingvaj problemoj,la Rajto je Komunikado,kaj la Internacia Lingvo,Kanado,1982.p.7.

(6) 二木紘三、前掲書、92頁。

(7) 言語学者の田中克彦氏はあるシンポジウムの席上で「『エスペラントという言葉を知っていますか？』ととき どき質問しますと、『あれっ、いまどきまだそんな言葉があったんですか』と非常に古い過去の歴史的事実のように考える方もいらっしゃいますし、『どこかできいたことがあるけれども・・・』と、古い出来事で、もう忘れ去られているように感じられることもあります。これは、運動の中心にいらっしゃる方には、まったく意外な反応かもしれませんが、案外そういうものであります」と発言している。（シンポジウム「いま、国際交流の言語とは？」、日本エスペラント学会、1988年）また、我が国の熱心なエスペランチスト水野義明氏の三部作『新エスペラント国周遊記』、(ソ連・東欧編、西欧編、中南米編、新泉社）のなかでも、各国のエスペランチストの高齢化が指摘されている。

(8) ザメンホフが活動を開始した19世紀末、ロシア帝国の支配下にあるポーランドや白ロシアでは、社会主義運動が活発になっていた。例えば、1898年にはロシア社会民主党創立大会が白ロシアのミンスクで、また1902年には同党の第二回党大会の準備協議会がザメンホフの生地ベロストークで開かれているが、同党の結成にあたって、中心的な役割を果たしたのは、「在ポーランド・ロシア＝ユダヤ人労働者総同盟（ユダヤ人ブント)」であり、同党の綱領問題でも、民族問題の取り扱いはかなりの議論を呼んでいた。拙書『ロシア社会民主労働党史』(五月社、1979年）第１章「党の創成期」を参照していただきたい。

(9) T.SEKELJ,Cû La Socio Bezonas La Internacian Lingvon?, Socilingvistikaj Aspektoj de la Internacia Lingvo,Tokio,1987,p.157.

(10) 同じようなことが、古代中国をとその周辺国家である朝鮮、日本との関係にもあてはまる。例えば、遣唐使としてシナにわたった空海が、

現地で漢語を使って筆談したことはよく知られている。

(11) ただしこれは聖職者＝知識人レベルでの話しで、各地域各民族の一般庶民のあいだでは、言語の分裂はかなり早くから進行していた。これを示す有名な事例は、カール大帝の帝国分裂時代の事件である842年のストラスブルクの誓約である。東フランクのちのドイツを根拠地とするルードヴィヒと西フランクのちのフランスを根拠地とするシャルルが兄のロタールに対抗するために、同盟を結ぶことを誓約したのであるが、すでに相手方の言語が理解できなくなっていたので、ルードヴィヒはシャルル側のロマンス語で、シャルルはルードヴィヒ側の古ドイツ語で誓約したのである

(12) 8－11世紀のスペインのイスラム帝国＝後ウマイア朝の首都コルドバは人口50～80万を擁するヨーロッパ第一の都会であり、道路は舗装され、夜には街灯がともっていたという。これに匹敵するのは、バグダードとコンスタンチノープルだけであり、当時の西ヨーロッパ地域には都会らしい都会はなかった。町にはイスラム寺院＝モスクが600、公共浴場が900、図書館が70あり、カリフの図書館には40～60万の蔵書があったという。

(13) 大東亜戦争を16世紀以降のヨーロッパのアジア支配に対する反撃とみなすならば、この戦争が、最大の植民大国の母国語であった英語の進出の最西端のフィリピンと最東端の香港に対する攻撃から、口火が切られたのは象徴的であった。また戦争中の日本における、野球用語の「ストライク」を「よし」、「ボール」を「だめ」としたような敵性語＝英語の追放運動を、たんに狂信的かつ排外主義的な愚行と片付けてしまうのは、浅薄な理解であろう。英語の浸透に対する抵抗は、これ以前にも以後も、ヨーロッパ諸国でも行われているからである。例えば、ドイツでは、「自動車（automobile）」、「電話（telephone）」

という英語の単語をそのままAutomobil,Telephonとして受け入れるのではなく、ドイツ語起源の単語によって合成した単語Kraftwagen、Fernsprecherを使うべきであるとの主張がなされたし、ロシアでも、自動車を、やはりロシア語起源の単語によって合成された単語самоходとするべきであるという主張が行われたことがある。今日では、ドイツでも、ロシアでも、結局英語の単語がそのまま使われて、Automobil,Telephon,автомобильが定着してしまっている。一方、日本では、日本語（漢語）起源の単語によって合成された単語「自動車」、「電話」が定着しているが、もしも、automobile、telephoneという単語が、英語の単語を無自覚的にカタカナに置き換える今日の日本に入ってきたならば、そのまま「オートモビル」あるいあは「オート」、「テレフォン」あるいは「テレ」というかたちで定着したと推測される。

(14) 蔣介石夫人宋美齢が英語に堪能であり、一方、毛沢東はほとんど西側のアングロ・サクソンの文化に接したことがなかったのは象徴的である。

(15) ソ連崩壊以後のロシアにも、英語は急速に進出している。私の個人的な体験であるが、以前にはキリル文字（いわゆるロシア文字）で表記されていたロシア国産のタバコの名前が、ほとんどラテン文字（ローマ字）で表記されるようになってしまった。この現象は、敗戦後の日本のタバコの名前のカタカタ化と軌を一にしている。

(16) 大学での英語教育を専門とする森住衛氏は「もし、スペインの無敵艦隊が（1588）がほんとうに無敵であったら、おそらく現在の英語教育はあり得ないと思います。また、ナポレオンがほんとうに利口で、イングランドの大陸封鎖令（1806）が成功していまして、あのときにナポレオンが勝っていたら、おそらく今日の英語の隆盛はないと思い

ます」と発言している。Plena raporto "Kio nun estas lingvo por internaciaj interŝanĝoj?"『いま、国際交流の言語とは？』(Tokio, 1988)、23頁。

(17) ちなみに、西ドイツはこの3つの戦争で2敗1引き分け、東ドイツは全敗であるから、ドイツ語が国際的に普及する可能性はほとんどないといえるが、今日見られるように、統一ドイツのヨーロッパ連合の中での比重が高まれば、また東ヨーロッパのスラヴ諸国の混乱が続いて、スラヴ諸国のドイツへの依存が高まれば、ドイツ語は限定された地域（中央・東ヨーロッパ）での「大言語」となるうる可能性を持っている。

フランスはこの3つの戦争に全勝したかのようであるが、いずれもイギリスとアメリカ合衆国およびロシア（ソ連）の手を借りて、かろうじて戦勝国に仲間入りすることができたにすぎず（言い換えれば、ドイツの影響下に入ることをかろうじて免れたにすぎず）、今日、国際的な普及の面で英語に次ぐ位置を保っているのは、18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパでのフランス国家の政治的・文化的優位と、イギリスに次ぐ植民地大国という地位の遺産であり、その自尊心にもかかわらず、これ以上の国際的な普及は考えられない。

日本はこの3つの戦争に1勝1敗1引き分けであった。日本は日清・日露戦争、第一次大戦に勝利を収めた結果、台湾、朝鮮半島、サイパン・ヤップ・パラオなどのいわゆる「南洋諸島」を獲得し、さらには、大東亜戦争の初期には、ビルマ、マレー半島、インドネシア、フィリピンなどを支配下に置いたために、この東アジア地域（いわゆる「大東亜共栄圏」）では、日本語が「大言語」になりつつあった。敗戦によって、この地域を失い、同時に日本語も「大言語」としての地位を失ったが、アメリカ合衆国に軍事的に保護されたなかで(＝1引き分け)、

経済成長に専念し、東アジア地域への経済的進出に成功したため、かつての「大言語」時代の遺産が失われないうちに、華僑を中心としたの反日意識を克服し、マレーシアのマハティール首相にみられる反西欧的な民族主義と結び付けば、日本語はこの地域での「大言語」となる可能性を持っているが、当然にも、この方向はアメリカ合衆国の政策と衝突し、アメリカの軍事的保護国としての日本の地位の再検討を国民に迫ることになるであろう。

(18) このこと自体が、国連＝連合国＝戦勝国であるとの歴史的な状況の反映であり、我が国のような敗戦国にとっては問題である。我が国では、「国際連合」と「連合国」がともにUnited Nationsの訳語であり、国連がもともとは連合国＝戦勝国の組織であることが、隠蔽され、「連合国」から排除された敗戦国＝日本が「連合国」＝「国連」を理想化するという倒錯的なイデオロギー空間が生まれた。

(19) 明治政府がはやくから英語文化圏に繰り込まれていた事情については、篠沢秀夫『日本国家論』(文芸春秋、1992年）の「帝国イメージへの西洋の影響」の章を参照していただきたい。

(20) さらに、近年、英会話の実務的能力を高めるとの掛け声のもとで、たんに英語を母国語として話すことができるにすぎないアメリカ人、イギリス人などを、英語の補助教員として、中・高の英語教育の現場に導入しているが、誤解を恐れず、戯画化して表現すれば、生徒が日本人の英語教師とともに、彼らの発音をあたかも神の御託宣として神妙に拝聴するという、これも倒錯的な情景が、日々の英語教育の現場で演じられていることになる。

(21) 65a Universala Kongreso de Esperanto,Kongresa rezolucio,Esperanto en la moderna mondo,p.398.

(22) 津田幸男編『英語支配への異論』（第三書館、1993年）、15頁。

(23) この人類史の冷厳な事実は、経済的・政治的な力を持たないエスペラント運動にとって、アポリアであった。世界エスペラント協会会長であったトンキン（H.TONKIN）は「我々はパラドックス、ある人の意見では、エスペラントの致命的な欠陥にぶつかっている。……英語が普及した原因は、英語の政治的・経済的な要素であったし、今もあり続けている。英語は世界の大半に押し付けられ、その結果、英語のお客さんが生まれた。エスペラントには、このような政治的・経済的な力はない」と率直に述べている。H.Tonkin,Esperanto kaj la Angla Lingvo : Du Lingvoj kun Diversaj Celoj, Socilingvistikaj Aspektoj de la Internacia Lingvo,p.116